

休日

休日の終わりに

明日の備えをひとつふたつ

古靴に墨を塗り、床屋の予約をとる

晴れた初夏の昼下がり

風はそよぎ、雲はゆっくり東へ向かう

明日はまだ

朝の無言の群集の一人となり

目的をそれなりに認め

気をそれなりに目的に向ける

目的を識ろうとして

自らの歴史を識ろうとして

誕生から三十数億年を経て生命は

人に進化した

自らの意思で

いや

もしかすると

退化したのか……

なぜなら

人は

生命の連鎖からはずれた

万物との共存を意思なくば成せぬ哀れな生存

地球の迷い子

そうでなくて空はかすまぬ

海はにごろぬ

「地球を救う」

「地球にやさしく」などは

あまりにも空虚

天変地異には

あまりにも無力

大地震による津波で

倒壊した家屋の中から、十五歳の少年とその祖母を救出した救難ヘリの操縦士には、同年代の息子と祖母がいる。ヘリから二人を送り出した後、機内で同僚に「うれしいですね。」と声をかけようとしたが、涙があふれて言葉にならなかった。

「おばあちゃんがいるから、先に」と、倒壊した家の屋根で真っ青な顔で震えていた少年は、「夜空の星がきれいでした。」と、救助を待った九日間を語った。

との朝刊の記事に

不覚にもこみ上げたものは

言葉にならない

もしかすると

自らを識ろうとして自らの意思で

生命は人に堕ちたのかもしれない

そうだ

堕ちてあればこそ

救難ヘリの操縦士の思いや

閉じ込められた家屋の隙間から星を見た

少年のように

こころざしや

まなざしの

ときとして垣間見る一滴の美しさに

人は、そして生命は

救われる

五月の

それにしてもよく晴れた休日の

光る風

古靴はそれなりに光り

それなりに足を

床屋に向ける